

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520037

研究課題名(和文)

道教の形成に及ぼした初期江南仏教の影響についての研究

研究課題名(英文)

Research for the influence of early Jiangnan Buddhism on the development of Daoism

研究代表者：

神塚 淑子 (KAMITSUKA YOSHIKO)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：20126030

研究成果の概要(和文)：

4世紀末、江南の地域に生まれた靈宝経は、仏教の影響を大きく受けた教理・儀礼の体系を作りあげ、それは道教の一つの重要な流れとして、後代にまで長く影響力を持ち続けた。本研究では、三国呉の支謙・康僧会によって訳された仏典と靈宝経との語彙・表現上の比較研究と、江蘇・浙江の地域から出土した魂瓶(神亭壺)などの出土文物の研究という両面から、初期江南仏教が道教の形成に及ぼした影響について考察した。

研究成果の概要(英文)：

The Lingbao Scriptures, born in the end of the fourth century in the Jiangnan area, established a system of dogma and ritual from the influence of Buddhism which became an important stream of Daoism whose impact lasted for generations. In this research the influence of early Jiangnan Buddhism on the development of Daoism is examined through the comparison of the expressions and vocabulary found in the Lingbao Scriptures and Buddhist manuscripts translated by Zhiqian and Kangsenghui in the Three Kingdoms and the work related to the Hunping, spirit bottles, recently unearthed in the Jiangsu and Zhejiang areas.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：中国宗教思想

科研費の分科・細目：中国哲学

キーワード：道教、江南仏教、三国六朝時代、六度集経、神亭壺

## 1. 研究開始当初の背景

東晋中期に江南の地に起こった上清派の新しい宗教運動は、旧来の天師道に対する改革の側面を強く持ち、新しい宗教的世界観と得道のための方法論を提示した。ついで、上清派の動きに刺激を受けて起こった靈宝派は、仏教の教理・儀礼を多く吸収しつつ、天

師道の伝統をも包摂する形で、洞真・洞玄・洞神の三洞の枠組みで道教の集大成を図ることを試み、その流れが隋唐時代以降、道教の主流になっていく。

靈宝派が作った靈宝経には、漢訳仏典の影響が多く見られる。(本研究で言う「靈宝経」とは、陸修静「靈宝経目」に名が見えるものを指す。) 靈宝経に見える仏教の観念・思想

については、Erik Zurcher “Buddhist Influence on Early Taoism” (T’oung Pao, vol.66, 1-3, 1980)の先駆的な優れた研究をはじめ、Stephen R. Bokenkamp “Sources of the Ling-pao Scriptures” (Tantric And Taoist Studies in honour of R.A. Stein, ed. by M. Strickmann, Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises, Bruxelles, 1983)や、王承文『敦煌古靈寶經与晋唐道教』(中華書局、2002)などの研究がある。研究代表者も、「靈寶經と初期江南仏教—因果応報思想を中心に—」(『東方宗教』91、1998)、「靈寶經における經典神聖化の論理—元始旧經の「開劫度人」説をめぐって—」(『名古屋大学文学部研究論集』哲学 51、2005)などの論文を著し、この問題についての検討を進めるとともに、『六度集經』についての研究を行い、初期江南仏教を代表する一人である康僧会の訳したこの經典が、道教に影響を及ぼしていることがわかってきた。初期江南仏教のもう一人の代表的な人物である支謙が訳した仏典とともに、あらためて詳細に、江南の地域で訳された仏典と道教經典との関連性について検討を行う必要があると考えられる。

一方、神亭壺(魂瓶ともいう)などの出土文物による初期江南仏教の研究も、本研究と関連が深い。この分野の研究としては、小南一郎「神亭壺と東呉の文化」(『東方学報』65、1993)、阮榮春『仏教伝来の道 南方ルート』(雄渾社、1996)をはじめ、いくつかの著書・論文が発表されている。仏像や胡人の姿の像を含む神亭壺は、中国における仏教伝来のルートを探る上での貴重な資料として注目されてきたが、これは、道教の側から見れば、靈寶經のような仏教受容の著しい道教經典が4・5世紀の江南の地域において作られるに至った素地を考える上での興味深い材料となるであろう。考古学・美術史・仏教学・道教学などの諸分野にまたがる学際的な視点からの研究が待たれる。

## 2. 研究の目的

本研究は、漢訳仏典と靈寶經の比較研究という文献方面の研究と、神亭壺などの出土文物の研究という両面から、初期江南仏教が道教の形成に及ぼした影響について総合的な研究を行うことを目的とする。具体的には、次のとおりである。

(1) 初期江南仏教を代表する支謙と康僧会の訳經が、靈寶經を中心とする道教經典にどのように影響を与えているのか、文献に即した実証的な研究を行い、三国六朝時代の宗教思想の特質を考察する。靈寶經は、因果応報思

想、浄土の觀念、大乘思想など、仏教における重要な考え方を取り入れているが、それは、仏教思想そのままの受容ではなく、微妙に変化させた形での受容である。支謙や康僧会の訳經と靈寶經の間に見られる用語や思想の共通点と相違点について具体的に検討し、仏教の思想や概念の中国的変容を明らかにする。

(2) 江蘇・浙江を中心とする地域から出土した神亭壺などの出土文物に関する考古学分野の調査研究の成果をふまえて、仏教と融合した道教が江南の地域で形成される素地が存在したことを確認するとともに、そのような江南の地域の宗教環境と、靈寶經に見える死者供養・祖先供養と考え方とのつながりについて考察する。三国呉・西晋時代に多く作られた神亭壺は、葬送儀礼と関連しており、神亭壺の上に仏像が刻まれていることがあるところから、仏教は葬送儀礼と結びついて広まったという見方がある。それでは、4世紀末の江南に起こった靈寶派の道教はどのような葬送の考え方をもち、それは、神亭壺からうかがわれるような宗教意識とどのような関係にあるのか。この問題について考察を行いたい。

## 3. 研究の方法

(1) 支謙の訳經については、靈寶經との関係が考えられるものについて、両者を、語彙・表現の面に至るまで綿密に対照させて比較検討し、靈寶經を作成した人々の宗教意識を探る。

(2) 康僧会訳『六度集經』については、研究代表者は平成18・19年度科学研究費補助金(研究課題「六朝隋唐時代における仏教譬喩經類の受容と道教」)の交付を受けたことを契機として、平成18年5月から、中国哲学・中国仏教・インド仏教・中国仏教美術・日本仏教説話の専門家10余名から成る『六度集經』研究会を組織し、毎月1回、名古屋大学文学部において会合を開いている。研究会では、『六度集經』を順次、丁寧に読み解き、日本語訳を作成するとともに、研究会のメンバーの専門の多様性を生かして、『六度集經』に記されたブッダの前世物語について、インドから中国・日本への展開の様相を、文献と図像の両面から考察を行っている。今回の科学研究費補助金を受ける期間においても、この研究会を継続して行い、『六度集經』を多角的な視点から検討する。

(3) 神亭壺については、考古学分野でのこれまでの調査研究の状況を、胡常春氏(山東大

学歴史学系卒業。山東省文物考古研究所での勤務を経て、現在、名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程在学中)の協力を得ながら確認する。そして、その上で、神亭壺の制作からうかがわれるような三国呉・西晋時代の江南の宗教環境、信仰のあり方が、4世紀末の靈宝派によって作られた靈宝經の内容とどのように関わっているのかを検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 支謙の訳經の中で、明らかに靈宝經の作成の時に用いられたと考えられるものに、『仏説龍施女經』と『仏説菩薩本業經』がある。また、『仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏壇過度人道經』(いわゆる『大阿弥陀經』)の中に過去仏の名を列挙して「已に過去す」という表現が見えるが、これは靈宝經における重要な教義である「開劫度人」の説を述べる時に、天尊の死について「過去」という語を用いているのと同じである。また、靈宝經を作った人たちが支謙のことを強く意識していたことは、支謙の師である竺法蘭が靈宝經の伝授の系譜の中に組み入れていることからもうかがわれる。これらはすでに指摘されていることではあるが、本研究の基礎となる重要な事柄であるので、再確認した。

(2) 康僧会訳『六度集經』については、名古屋大学文学部において、平成20年度に10回、21年度に11回、22年度に11回の研究会を開催し、巻4「戒度無極章」の16話、巻5「忍辱度無極章」の14話を読み終わり、巻6「精進度無極章」の巻6の途中まで読み進めた。研究会での検討結果にもとづき、巻4・巻5の日本語訳をまとめ、冊子「六度集經(巻4・巻5)訳稿」を作成した。これは、平成18・19年度科学研究費補助金(研究課題「六朝隋唐時代における仏教譬喩經類の受容と道教」)の成果報告書に掲載した巻1～巻3の日本語訳に続くものである。

(3) 『六度集經』に関連する研究として、その他に、研究期間内に3つの成果をおさめた。その第1は、元始天尊に関する口頭発表と論文執筆である。元始天尊は、六朝時代の靈宝經にはじめて現れ、隋唐時代以降、道教の最高神として位置づけられる神格であるが、靈宝經のひとつである『太上洞玄靈宝智慧定志通微經』には元始天尊の前世物語が記されており、それは、『六度集經』巻2「須大拏經」に見えるスダーナ太子本生譚の翻案である。元始天尊には、このように仏教からの影響と、元始天王という中国南方神話に由来する要素とが含まれており、六朝隋唐時代の仏教・道教間の論争の一つのテーマとなってきた。

この問題について、研究期間内の2008年10月に中国人民大学(北京)で開催された第3回中日仏学会議において中国語で口頭発表を行い、その内容を加筆・修正した日本語の論文「元始天尊をめぐる三教交渉」を著した。

(4) 『六度集經』に関連する成果の第2は、著書『老子 道への回帰』において、『六度集經』の「本無」の思想に言及したことである。梵語 tathata の訳語として「本無」という語を用いることは、支謙の訳經にも見えるが、『六度集經』には「神を本無に還す」という表現が頻出する。「神」は、人の身体に宿り精神作用や認識作用をつかさどる神妙不可思議なものであるが、有形の身体が生じる以前の根源の無の世界に、この「神」を還すことが、生死を超越した究極の境地に至ることであるとされ、衆生をそのような境地に導くのが菩薩の務めであると説かれている。「神を本無に還す」という考え方は、根源の「道」の世界に帰ることを説いた『老子』の思想とつながるものであり、仏教思想と中国固有の思想との融合がここに見られることを指摘した。

(5) 『六度集經』に関連する成果の第3は、『六度集經』に用いられた語彙・表現と後代の道教經典のそれとの類似性を考察したことである。研究期間内に著した論文『海空智藏經』続考一卷十「普記品」を中心に一」は、拙稿「『海空智藏經』について」(『東洋文化研究所紀要』142、2003年)の続編であるが、この中で、『六度集經』に見える「神を本無に還す」という表現が、隋代の『本際經』の「神を反して無為湛寂常恒不動の処に還る」という表現を経て、唐代初めの『海空智藏經』の「神を反して海空蔵に入る」という表現になり、これが仏教の「涅槃」と同様の意味で用いられていることを述べ、ここには、輪廻転生を「神」の不滅として理解した中国的な仏教受容の特徴が見られることを指摘した。

(6) 神亭壺については、考古学分野での研究状況を把握し、その上で、神亭壺からうかがわれる三国呉・西晋時代の江南の地の宗教環境と、靈宝經に見える死者供養・祖先供養の考え方とのつながりを考察した。神亭壺を生み出したのは、呉会(呉郡・会稽郡)の土着の豪族社会であったと推定されている(小南一郎「神亭壺と東呉の文化」参照)。一方、靈宝經を作り出したのも、江南の土着豪族である葛氏を中心とする人々である。神亭壺が作られた三国呉・西晋時代は、靈宝經が作られ始める時期とは100年近い隔りがあるが、支謙の師である竺法蘭が靈宝經の伝授の系譜の中に組み入れていることからうかがわ

れるように、靈宝經を作った人々は、葛仙公（葛玄）が生きていた三国呉の時代のことを強く意識していたことがうかがわれ、神亭壺と靈宝經とのつながりを考えることは、それほど不自然なことではないと思われる。神亭壺上の碑銘に、「用此喪葬、宜子孫、作吏高遷、衆無極」「富且洋、宜公卿、多子孫、寿命長、千意万歳未見英」などと、現世的な願望が刻まれているが、これは靈宝經に強く見られる現世的傾向と共通する。三国呉の時代から100年近くを経て、仏教受容が進み、靈宝經には仏教の教理・儀礼が積極的に取り入れられているが、その根底には、神亭壺が示すような三国呉・西晋時代の江南の地の人々の宗教意識が存在していたことを確認した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

##### ① 神塚淑子

「元始天尊をめぐる三教交渉」、麥谷邦夫編『三教交渉論叢続編』、京都大学人文科学研究所、査読無、2011、pp. 99-125、

##### ② 神塚淑子

「『海空智藏經』続考一卷十「普記品」を中心に一」、日本中国学会報、査読無、第62集、2010、pp. 59-72、

##### ③ 神塚淑子

「天尊像、元始天尊像の問世、流行与靈宝經」(李淞主編『道教美術新論 第一屆道教美術史国際研討会論文集』、山東美術出版社)、査読無、2008、pp. 67-78、

##### ④ 神塚淑子

「空海の文字觀及其六朝宗教思想的關係」(侯甬堅・江村治樹編『中日文化交流的歴史記憶及其展望』、陝西師範大学出版社)、査読無、2008、pp. 3-20、

[学会発表] (計2件)

##### ① 神塚淑子

「『老子道德經』關係敦煌写本小考一『老子道德經義疏(佚名)』(S6044+BD14677)を中心に一」、名古屋大学文学研究科・陝西師範大学共催国際シンポジウム「人文学研究方法の現状と展望」、2008年11月23日、名古屋大学文学研究科

##### ② 神塚淑子

「中国仏道教圍繞元始天尊的論争」、第3回中日仏学会議、2008年10月26日、中国人民大学(北京)、

[図書] (計1件)

##### ① 神塚淑子

『老子—〈道〉への回帰—』(シリーズ『書物誕生 あたらしい古典入門』、岩波書店、2009年、総232ページ、

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

神塚 淑子 (KAMITSUKA YOSHIKO)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：20126030